イノベーション

宮地エンジニアリンググループ株式会社　取締役　石崎　浩

企業が持続的に発展していくためには、様々な意味で多面的なイノベーションを起こすことが不可欠である。この大きな命題の持つ意味を体系的かつ論理的に説明することは私には到底出来るものではないが、我々に身近な「技術」の分野について考えてみることとする。

イノベーションとは、一義的には「技術革新」を意味するが、広義には企業が持続的に発展し、少なくとも安定した経営を継続するためには、労働生産性を向上させることが何より求められ、業務改善はもとより働き方の効率化、さらには企業が生み出す製品やサービスの付加価値向上など多面的な革新をも意味するものと捉えたい。

イノベーションを英和辞典で調べてみると、「これまでなされなかったこと、経験されなかった、あるいは作り出されなかったようなものであること」とある。

イノベーションの父と呼ばれた経済学者ジョセフ・シュンペーターは、1912年に刊行された『経済発展の理論』第2章「経済発展の根本現象」で、経済成長を起動するのは企業家による新結合（ニューコンビネーション）だとしたのである。シュンペーターは新結合として、新しい生産物あるいはその新しい品質、新しい生産方法、新しい組織、新しい販売市場の創出、新しい買い付け先の開拓など5項目を挙げ、こうした新結合を遂行することがイノベーション（新機軸・革新）であるとした。

「イノベーションは知と知の組み合わせから生まれる」とその原理を唱え、さらには「既存の知と別の知を新しく組み合わせることによって新しい知が生まれる」と説く。

新しいアイデア、我々にとっては新しい技術というものをゼロから生み出すのは、非常に難しい。技術に限って言えば、ほとんどの新しい技術は、ある既存の技術と異なる分野の技術の組み合わせにより生まれている。ある一定期間同じ分野の仕事に携わっていると、自分に関係するもの、認知できるものしか視野には入らず目の前の組み合わせにのみ終始していないだろうか。

ここからイノベーションは生まれてこないはずである。

一方で我々の世界では、「技術の伝承」が叫ばれてきた。これは、技術のエッセンス、その本質を伝承してゆくべきもので、技術の肝となるところを知らずして、別の分野の技術と組み合わせることなど出来るはずがないのであり、「技術の伝承」はイノベーションを推し進めてゆく上での太い幹であると考えねばならない。

我々にとって根幹となる技術において、いかにしてイノベーションを起こすことができるのだろうか。その答えは「身の回りではなく、しかも別の異なる分野に目を向けること」ではないだろうか。直ぐ近くにあるものを組み合わせるのではなく、全く関係がなさそうなところにある知恵と自分が持っている知恵を組み合わせる方がInnovativeなものが生まれる可能性は高いと考えられる。

一方で、公共事業に重心を置く我々の業界では、過去の経験・実績、長年かけて積み上げられてきた技術基準などによって技術の伝承がなされてきた。これらがイノベーションを阻むことにもなりかねない。この二律背反の命題に取り組むためには、発注者である官は規制緩和を進め、また受注者である民はInnovativeな発想の出来る技術者を育て、官民一体となったイノベーションに挑まなければならない。

トヨタ自動車豊田章男社長は、今年の入社式で「就職して安泰と思わず、未来を切り拓くことが皆さんの使命と考えてほしい。挑戦しなければ自分たちの未来はない」と述べられたそうである。

イノベーションを起こすことは、これまでにない新しい技術への挑戦であり、新しい分野、新しい考え方に踏み込むことである。そこには、失敗はつきものであり、この失敗を恐れていては挑戦はできない。特に若い技術者は、失敗を恐れず挑戦してほしい。そこから、様々なイノベーションが湧き上がってくるはずである。